

## 不断念仏について

——諸往生伝を中心として——

奈良 弘元

### 一

慶滋保胤による『日本往生極樂記』をはじめとして、平安時代に成立した諸種の往生伝を通覧してみると、「不断念仏」についての記事が散見される。

不断念仏とは、『三宝絵詞』にいうところの「比叡の山の不断念仏」であり、略して「山の念仏」といわれているものである。しかし、『三宝絵詞』にみえる不断念仏と、諸種の往生伝に散見されるそれとを比較してみると、同じく「不断念仏」と記されてあつても、その内容は必ずしも同一でない。

ここでは、平安時代における弥陀信仰の実態を明らかにする一つの手がかりとして、諸往生伝に散見される不断念仏の特徴を明らかにしてみたい。

### 二

『日本往生極樂記』の延昌の項には「平生常曰、先命終之

期、欲修三七日不断念仏、其結願之日、我入滅之時也、……天徳二年十二月廿四日命門弟子、三七日間令修不断念仏、明年正月十五日入滅」とあつて、延昌が平生常にいつていたごとく、その臨終に際して、弟子達に命じて三七（二一）日間不断念仏を行かせたとしている。

これを『三宝絵詞』のそれと比較してみると、「仲秋の風すすしき時、中旬の月明なるほど、十一日の暁より十七日の夜にいたるまで、不断に令行也」とあつて、仲秋の名月をはさんで、八月の十一日から十七日までの七日間行われる『三宝絵詞』の不断念仏と、延昌が修せしめた命終の期に先立つての不断念仏とは、その修する時期に相違がみられ、また『三宝絵詞』には「我山には三所に分て、一七日用也。合三七日也」と但書があるとはいへ、その修する期間においても相違がみられる。

さらに『三宝絵詞』には「身は常に仏を廻る、……口には

常に経を唱ふ、……心は常に仏を念ず」とあり、しかも、この不断念仏は「四種三昧の中には、常行三昧となづく」その常行三昧の念仏と同じものであるとしている。しかし、『摩訶止観』には「九十日身常行無<sub>三</sub>休息、九十日口常唱<sub>三</sub>阿弥陀仏名<sub>三</sub>無<sub>三</sub>休息、九十日心常念<sub>三</sub>阿弥陀仏<sub>三</sub>無<sub>三</sub>休息」とあつて、九十日間の行が明示されており、しかも口には阿弥陀仏の名号を唱えることが示されていて、両者の間に少しく相違がみられる。

これに対して、延昌が臨終に際して弟子に修せしめた不断念仏が、どのような内容のものであつたかは、『日本往生極樂記』の記事からは不明である。

### 三

さらに『後拾遺往生伝』巻中には、円宗寺小綱・某が「已及<sub>三</sub>暮年、数日臥病、偏抛<sub>三</sub>他營、專願<sub>三</sub>往生、為<sub>三</sub>六根懺悔、限<sub>三</sub>七箇日、行<sub>三</sub>法華懺法、修<sub>三</sub>不断念仏」とあつて、ここでは、暮年に及んで数日病の床に臥したということで、必らずしも臨終に際してではなく、また、その期間も七日となつてゐる。

また、備中国新山別所の定秀上人は「嘔<sub>三</sub>衆僧、一日夜修<sub>三</sub>不断念仏<sub>三</sub>して翌日入滅しているが、ここでの臨終に際しての不断念仏は一日夜のみである。

さらに、『日本往生極樂記』には「尼某甲、大僧都寛忠同

不断念仏について（奈 良）

産姉也、一生寡婦、終以入道、……唯念<sub>三</sub>弥陀、語<sub>三</sub>僧都曰、明後日可<sub>レ</sub>詣<sub>三</sub>極樂、此間欲<sub>レ</sub>修<sub>三</sub>不断念仏、僧都令<sub>三</sub>衆僧三箇日夜修<sub>三</sub>念仏三昧」とあつて、ここでは、寛忠の姉・尼某甲の臨終に際して、三箇日夜、念仏三昧が修されたとしている。しかも、ここで注意しておきたいことは、尼某甲が極樂往生を願つて不断念仏を修せんとしたので、寛忠が衆僧を請じて「念仏三昧」を修せしめた、ということである。ここでいう「念仏三昧」は、記事の内容からみて、不断念仏の別称と考えられるのであるが、さらに、この念仏三昧が、臨終に際して行われているという点で、前にみた延昌や定秀の場合に符合するし、しかもそれが弟子や衆僧によつて修されたとする点でも前二者の例に共通する。また、極樂往生を願つて行われたとする点では、円宗寺小綱某の事例によつて証される。したがつて、ここでいう「念仏三昧」は、不断念仏の別称とみて間違いないであろう。

このようにみえてくると、同じく『日本往生極樂記』に「延曆寺僧明請、……暮年有<sub>三</sub>小病、召<sub>三</sub>弟子僧静真、相語曰、地獄之火遠現<sub>三</sub>病眼、念仏之外誰敢救者、須<sub>三</sub>自他共念仏三昧、即請<sub>三</sub>僧侶<sub>三</sub>枕前令<sub>レ</sub>唱<sub>三</sub>念仏号」とあるところの念仏三昧も、これまた不断念仏と理解されるであろう。

前にふれたように、定秀は、その臨終に際して、衆僧を請じて一日夜の不断念仏を行つて翌日入滅するのであるが、そ

の不断念仏の間に、自らも「或起而礼拝、或臥而合掌」して極樂往生を期しているのであるが、『捨遺往生伝』巻上にみえる、多武峰安養房の住僧經暹の場合は「勸誘衆僧、相共称誦弥陀經一卷、宝号数百遍唱礼之後、手結定印、右脇西面、如眠遷化」とあるように、衆僧と共に阿弥陀経を読み、阿弥陀仏を礼拝しながら名号を唱えること数百遍に及んで後、眠るように入滅した。この場合、不断念仏を修したとも念仏三昧を修したとも明記していないが、臨終行儀として衆僧を請じて宝号を唱え、仏を礼拝したという点で、それが不断念仏であつたことは、前の定秀の例に徴しても明らかである。

四

不断念仏ないし念仏三昧が、一方において、極樂往生を期しての臨終行儀として行われていたと同時に、他方においては平生の行業として行われていた。入道乗蓮は毎日の「講説之後、必修念仏三昧」していたし、入道寂禅も「念仏三昧、日夜之行」であつた。

さらに、伊予国法樂寺の尼安樂は「出家之後、廿五年毎日所作、弥陀名号五万遍」をもって常の勤めとしたという。もつとも、この安樂尼の場合には、それぞれ、観音の真言五千遍、光明真言千遍、普賢の十願の名三百遍唱えることを併せ行っているのであるが、天台首楞嚴院の教真は「只以念仏

六万遍、為毎日之勤」しており、堀河天皇中宮の侍女である下野母尼も「一生之間、……毎日念仏滿六万遍」つる偏修念仏の生活であつた。

また、天台の隆暹は「早捨禪密之学、偏修往生之行、毎日念仏十二万遍、更無他勤」き熱心さであり、永観にいたつては「奉唱弥陀宝号、不知幾許、初毎日一万遍、後亦六万遍、別滿百万反三百度、漸及暮年、舌乾喉枯、只事観念」という有様であつた。

このように、一日一万遍から百万遍に及ぶ多量の念仏行は、隆暹の項に明記されていたように平生の「往生之行」といわれていたものであり、平生の往生行としての多量念仏の行もまた、不断念仏の一形態であつたと理解されるのである。

すなわち、楞嚴院の沙門信敬の項には「常時不断、奉唱弥陀宝号」とあつて、平生の不断念仏が述べられており、念西比丘の項には、「念仏之外、全無他意、昼夜不断、称南無仏、以小豆為其数、已及二百八十石云々、……命終之夕、端坐向西……」とあつて、平生より、西方弥陀の浄土への往生を期することに専念して、昼夜不断に南無仏と称したというのである。しかも、昼夜不断に続けられた念仏の数を小豆でもつて数え、二八〇石になつたというのであるから、膨大な数量の念仏行であつたことになる。

ただここで気になるのは「昼夜不断、称南無仏」とあつて、弥陀の宝号を称えたと明記していない点である。しかし、久しく台嶺に住していた沙門重怡に関する記事の中には「自大治二年三月、至保延六年八月、前後十三年、通計四千日、毎日唱弥陀宝号、十二万遍、以小豆為其数、二百八十七石六斗」とあつて、その叙述がより詳細になつており、その唱えた念仏の数は念西の二八〇石に匹敵する二八七石六斗となつており、しかも、それは一日十二万遍ずつ、十三年間四千日にわたつて唱えられたものとしている。しかも、ここでは弥陀の宝号を唱えたと明記しているのである。したがつて、念西の場合にも、「称南無仏」の仏は阿弥陀仏であると考えるのが自然であり、一日に何万遍も唱えねばならない関係から、「南無阿弥陀仏」を「南無仏」と短縮して唱えたと推測されるのである。

## 五

以上の考察から、われわれは、その要点を次のようにまとめることができるであらう。

不断念仏には

(一) 命終に際して、極樂往生を期して行われる、臨終行儀としてのそれ、と

(二) 平生よりの極樂往生の行業として行われるもの

とがあり、命終に際して行われる場合には、一般的にみて

不断念仏について(奈良)

(一) 衆僧が屈請され、

(二) 命終せんとする者の枕前にて

行われる。その場合の形態として

(イ) 阿弥陀経を誦誦し、阿弥陀仏を礼拝しながら、名号を

唱えるもの

(ロ) 礼拝と名号を唱えるのみ

(ハ) 単に名号を唱えるのみ

の三つの形態があつたと考えられる。

また、その勤修期間については、一日・三日・七日・二十

一日とまちまちで、必ずしも一定していない。

次に、平生よりの行業としての不断念仏については、阿弥陀

仏の名号を唱える、それも少しでも多くの名号を唱える、

という点に集中されており、

(1) 毎日五万遍(安樂尼)

(2) 毎日六万ないし十万遍(教真)

(3) 毎日十二万遍(隆暹・重怡)

(4) 時に百万遍(永観)

などの例にみられるように数量にものをいわせようとする念仏である。

☆

最後に、諸往生伝にみえる不断念仏は、「合殺」と同一曲調のものである、という意見があるので、その点にふれてお

くことにしたい。

不断念仏と合殺とが同一曲調を有するものであるとするのは、伊藤真徹氏であるが、その所論を左に引用する。

『後拾遺往生伝』巻下の藤原為隆（一一三〇七）は、「数日病惱。万法不<sub>レ</sub>瘳。遂辞<sub>三</sub>官職<sub>一</sub>。偏勤<sub>三</sub>仏事<sub>一</sub>。同九月八日。沐浴香潔。出家受戒。相<sub>三</sub>接僧侶<sub>一</sub>。同音不断念仏合殺。已值<sub>三</sub>善知識<sub>一</sub>。如<sub>三</sub>平生願<sub>一</sub>。安<sub>三</sub>住正念<sub>一</sub>。乍<sub>レ</sub>居逝薨」（続浄六・一二三）とあつて、不断念仏と合殺が併記せられているので、両者は共に曲調をもち、その間に何等違和感を抱かしめるものではない。菅原順季（一〇九九七）は老年に及び六箇年、「禪僧三人許。念仏合殺之声。常聞<sub>三</sub>耳根<sub>一</sub>」と訴えていたが、死期に先立つこと七日、「嘔<sub>三</sub>僧徒<sub>一</sub>。修<sub>三</sub>念仏三昧<sub>一</sub>。行<sub>三</sub>法華懺法<sub>一</sub>。其第七日結願啓白之夕。自他合声念仏合殺。其体如<sub>レ</sub>寢。寂而氣絶」（同上・一二七）とある。最後の自他合声念仏は念仏三昧と同じ内容であつて、曲調ある念仏であつた。

右の所論においては『後拾遺往生伝』巻下にみえる、藤原為隆と菅原順季との事例をふまえて立論しているが、特に問題となるのは「相<sub>三</sub>接僧侶<sub>一</sub>、同音不断念仏合殺」「自他合声念仏合殺」の箇所である。

伊藤真徹氏は、前者を「僧侶に相接して、同音の不断念仏と合殺とをなす」と読んで、不断念仏と合殺とが同音である、と理解し、後者に関しては、「（不断）念仏と合殺とが合

声」であり、「合声」とは「同音」のことであると理解しているようである。

しかし、前者の場合は、その「同音」は不断念仏と合殺とが同音ではなくて、屈請した僧侶の声と同音にて。不断念仏をなし、また、合殺をなしたと読むべきであり、後者の場合の「合声」も、自他合声、すなわち、屈請した僧侶と命終に臨んでいる菅原順季とが声を合わせて不断念仏を行い、合殺を行つたと読むべきであろう。

その根拠として、あげたいのは、前にみた備中国新山別所の定秀上人の項にみえる記事である。

承保三年三月二日、嘔<sub>三</sub>衆僧<sub>一</sub>、一日夜修<sub>三</sub>不断念仏<sub>一</sub>、念仏之間、或起而礼拜、或臥而合掌、……其念仏之終、結願之後、更令<sub>三</sub>諸僧<sub>一</sub>唱<sub>三</sub>合殺<sub>一</sub>、自持<sub>三</sub>香炉<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>五色糸<sub>一</sub>繫<sub>三</sub>本尊手<sub>一</sub>、寄<sub>レ</sub>眼瞻<sub>三</sub>尊願<sub>一</sub>、動<sub>三</sub>唇称<sub>三</sub>仏号<sub>一</sub>、漸至<sub>三</sub>子尅<sub>一</sub>、寂而入滅、……于時承保三年三月三日、行年六十四<sup>④</sup>。

ここには、不断念仏と合殺とが明確に区別されており、不断念仏が終つた後に、さらにまた合殺が行われたとしているのである。

前にみたように、不断念仏には臨終行儀として行われる場合と、平生よりの行業として行われる場合とがあり、とくに平生よりの行業として行われる場合の不断念仏は、一日に少ない場合で一萬遍、多い場合には十数万遍から時に百万遍に

及ぶという、歴大な数の称名行であつた。したがつて、南無阿弥陀仏を略して「南無仏」と称えたと推測される事例もあるほどであつた。

このようにみえてくると、不断念仏が合殺のように曲調をもつて唱えられたとは、とうてい考えられないのである。曲調をもつた不断念仏が行われていたとすれば、一日何万・十何万という歴大な遍数の称名は不可能であると考えるからである。

1 『羣書類従』（統群書類従完成会・訂正三版）第五輯、四〇三頁。

2 『大日本仏教全書』第一一巻、四六七頁。

3 『大正新脩大藏經』第四六卷、一二頁。

4 『統羣書類従』（統群書類従完成会版）第八輯上、三一五頁。

5 『拾遺往生伝』卷下（同右、二七三～四頁）。

6 『羣書類従』第五輯、四〇七～八頁。

7 同右、四〇四頁。

8 注5に同じ。

9 『拾遺往生伝』卷中、『統羣書類従』第八輯上、二五〇頁。

10 同右、卷上（同右、二四〇頁）。

11 同右、卷下（同右、二八一頁）。

12 『後拾遺往生伝』卷中（同右、三〇四頁）。なお『三外往生記』の教真の項には「念仏為し事、生年三十以後、毎月二個度、必修三百万遍念仏、以為三往生極樂之因、大都日別、修二十万遍

不断念仏について（奈良）

念仏」（『統羣書類従』第八輯上、三三七頁）とあつて少々その内容を異にしている。

13 同右、卷上（同右、二九二頁）。

14 同右、卷上（同右、二九六頁）。

15 『拾遺往生伝』卷下（同右、二七七頁）。

16 『三外往生記』（同右、三四二頁）。

17 同右（同右、三四〇頁）。

18 『本朝新修往生伝』（同右、三五七頁）。

19 『平安浄土教信仰史の研究』昭和四九年・平楽寺書店、二四七～八頁。

20 注5に同じ。